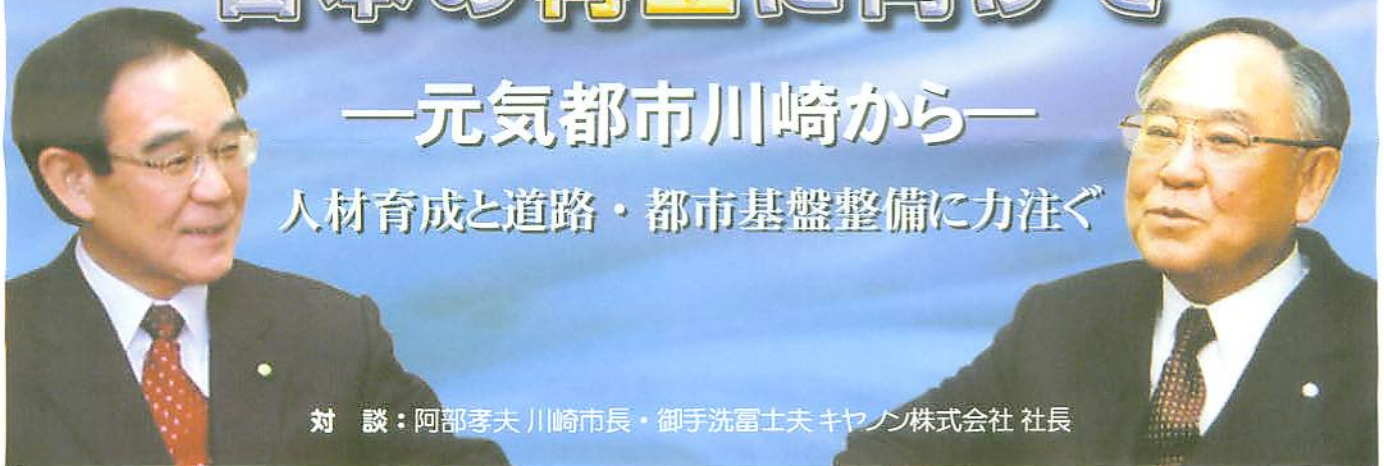


## 日本の再生に向けて

—元気都市川崎から—

人材育成と道路・都市基盤整備に力注ぐ



対談：阿部孝夫 川崎市市長・御手洗富士夫 キヤノン株式会社 社長

キヤノンは川崎市内に大規模な研究開発・生産技術センターの建設計画を決め、着々と準備を進めている。一方、2期目を迎えた川崎市の阿部孝夫市長は、市政の改革に取り組み、着実に成果を上げている。阿部市長は、キヤノンの御手洗富士夫社長と川崎市役所で「日本の再生に向けて—元気都市川崎から」をテーマに対談した。司会 は日本経済新聞社広告局。

### (重厚長大産業拠点から研究開発拠点へシフト)

—キヤノンの研究開発拠点構想について。

■阿部 川崎市はかつて臨海部を中心に重厚長大型の産業が集積していましたが、オイルショック後は内陸部でエレクトロニクス産業が発展するなど産業構造が大きく転換、そうした中で、キヤノンが幸区に矢向事業所をつくり、さらに同区柳町11ヘクタールに生産技術センターをつくれるということは象徴的であり、本当に感謝しています。他企業の研究開発拠点の立地も相次ぎ、羽田空港の再拡張・国際化を控えて、世界的な企業が川崎を拠点に活躍されることを期待しています。

キヤノンでは最終的に数千人規模の従業員が活動するということですので、税収、経済面での期待もさることながら、川崎市の対外的なイメージの向上、文化面での寄与にも期待しています。

●御手洗 我々はここで次世代の生産システムやソフトといった生産技術の研究開発の拠点をつくろうとしています。この立地は東京都大田区下丸子にある本社や他事業所とのアクセスが非常に良い。JR南武線沿線のため輸送力が大きく、駅から近く人材の確保がしやすい。研究開発拠点はできるだけ本社の近くに置いて連携を強めたい。その意味で、柳町(川崎市幸区。JR川崎駅より徒歩約10分)は理想的でした。

### (国際競争力取り戻す高付加価値産業へ転換)

—日本の再生に向け、低下したとも言われる国際競争力を取り戻すには。

●御手洗 一つは高付加価値産業への転換でしょう。日本も経済成長に伴って国民生活が向上しました。今後も生活コスト、社会コストを吸収できる付加価値の高い産業の創設に向かうべきです。キヤノンも高度成長期に低マージンのカメラから事務の合理化を実現する高付加価値の事務機へと転換していきました。

もう一つは、1989年ベルリンの壁崩壊後の東西対立解消により大きく進展したグローバル化。日本の優秀な労働力だけに頼ってきた産業は中国などに移転して一挙に競争力を失いました。日本の産業空洞化です。なおかつ悪いことに日本は今後さらに、少子高齢化の傾向をたどっています。こうした中で、従来の労働集約的な産業から装置工業型の産業に変えていくべきです。

例えば、複写機の組立作業は、ほとんど人間が行っています。これをいくつかのユニットにばらして、ユニットごとに自動機で無人化してつくる。そして最終段階でこのユニットを人間が組み立て、調整して完成するようになれば、人の数は減り、作業も楽になる。柳町ではまさにこういった研究をしようとしています。日本のものづくりの形を変えて世界的な競争力を持たせて、労務費が高く、少子高齢化の社会となる日本でも存続できる生産方式に挑戦します。

■阿部 川崎市内にはKSPなど、サイエンスパークが3つあり、そこで育ったベンチャーの中には上場したところも出ていますが、行政としては地球環境問題を解決する環境技術の開発、それに医療、介護、福祉など高齢化社会に対応した産業の育成に力を入れています。

●御手洗 60年代後半から80年代末まで、米国に駐在していました。ベトナム戦争で疲弊し、日本などの輸出攻勢で産業が競争力を失うなか、81年に就任したレーガン大統領が「強いアメリカ」